

マイケル・ファラデー

石原純

青空文庫

電気学の始まり

十九世紀の終りから今世紀にかけては、電気の世のなかと言われているほどに、電気の利用がさかんになって来ました。実際に皆さんが自分たちのまわりを見まわして見るならば、電気がどれほど多くつかわれているかがすぐにわかるでしょう。電灯やラジオを始めとして、電信、電話、電車から、たくさんの工場で使われている電力や、そのほかいろいろな種類の電気の利用をかぞえてゆくと、とても一々挙げきれないほどに多いのです。ですから今の人々の生活から電気の利用を取り除いてしまったなら、どん

なに不便になるかわかりません。ところで、電氣がこれほどさかんに使われるようになったというのも、つまり電氣の学問がそれまでに非常に発達したおかげに外ならないのです。さてこの電氣の学問がこのように発達するのには、それはもちろんたくさんの方の苦心を経た研究がかさねられて来たのに依るのでありますが、なかでも最も多くそれに貢献したのは、ここにお話ししようとするファラデーと、それに続いてその仕事を完成したマクスウェルとの二人であることは、誰しも認めないわけにはゆかないのです。そういう事をよく考えてゆくと、今日電氣の利用で多くの便利を得ている人々は、この二人の学者の名を忘れてはならないのですし、そしてその研究に対して限りなく感謝しなくてはなら

ない筈はずであると思われます。

電気の現象は、二千年以上も古いギリシャ文明の頃に既に知られていたと言われていますが、それを学問的に研究し始めたのは、やはり十六世紀の末頃で、ちょうどガリレイなどがイタリヤで活躍していた時代なのですから、つまりそこには科学が興るような時勢の動きのあったことが、これからもわかるのです。このころイギリスにギルバートという医者があつて、後にはエリザベス女王の侍医にまでなつたのでしたが、この人が電気や磁気の現象を初めて研究し出したので、その実験を女王の前で行つて、非常な評判になつたということが伝えられています。もちろんその頃の実験などはごく簡単なものなのですが、ともかくそれが機縁とな

つて、だんだんにいろいろな学者が電氣の研究を行うようになって、たのでした。十七世紀になると、空氣ポンプの發明で名だかいドイツのゲーリツケという人が電氣を起す起電機という機械をつくり、その後だんだんにこれが改良されて、いろいろな電氣の実験が行われるようになりました。しかしその後の最も眼ぼしい進歩は、十八世紀の末にイタリヤのヴォルタによつて電池が發明されてからであります。これは同じくイタリヤのガルヴァーニという解剖学者が蛙の脚に電氣のおこるのを見つけ出したことから、ヴォルタが考えついたのですが、電池がつくられると、針金に絶えず電氣を通すことができるのでいろいろ新しい事実が見つけ出されるようになったのでした。ヴォルタ自身の行つた水の電氣

分解の実験などもその一つですが、中でも重要なのは、デンマークの学者でエールステットという人が針金に電氣が流れていると、その傍に置かれた磁石の針に力を及ぼしてその向きを変えることを見つけ出したことで、これが実にその後の電氣の学問のすばらしい発達の出発点になったのでした。このエールステットの発見は一八一九年のことでした。

エールステットの発見に引きつづいて、フランスのアンペールや、ドイツのオームの大切な研究が現れたのですが、それらの話はここでは省いておきます。しかしともかくもこのようにして電氣の現象について学問の上で非常に注目されるようになったときに、ちょうどファラデーが出て、その研究をますます進めたので

ありました。前にも言ったように、今日電氣の利用のおかげで便利を得ていた私たちは、せめてファラデーがどんな学者であつたかということぐらいは、ぜひとも知っていなければならぬと思われるのであります。

学者となるまでのファラデー

マイケル・ファラデーが学者として尊敬すべき偉大な人物であつたのは言うまでもありませんが、それ以上に彼が貧乏な家に生まれながら学問への強いあこがれと、それへの自分の熱心な志とで、絶えずその道を踏み進んで行つた真摯な態度を見てゆきます

と、誰しもこれに感激しないわけにゆかないのであります。もちろんそこには科学というもののすばらしい興味が彼をそれへ強く惹きつけたのにはちがいありませんが、同時に彼が世間なみの立身出世などということには見向きもしないで、ひたすらに学問の尊さを味わおうとした敬虔^{けいけん}な心によるのであったことを考えてゆきますと、今さらにその高い人格を仰視^{ぎょうし}しなくてはならないのであります。

フアラデイは一七九一年の九月二十二日にイギリスのロンドン郊外にあるニューイングトン・ブツツという処^{ところ}で生まれました。その家は鍛冶屋でありましたが、父が病気に罹^{かか}ったので、フアラデイの六歳になった頃にこの店をもやめて他に移住したと云^いうこ

とですから、それ以後は随分ひどい貧乏ぐらしをしていたのでした。それでファラデイが十三歳になったときに、或る文具店に丁稚奉公に出されました。そして最初に新聞配達の走り使いをさせられていましたが、そんな仕事にも真面目でよく勤めたので、一年ほど経ってから同じ店の製本の仕事の方に廻まわされたのでした。

さて、人間には何が幸になるかわからないのです。もちろんファラデイが製本仕事に廻まわされたというのも、よく真面目に勤めたからにちがいないのですが、この製本をやっているうちに、そのなかからおもしろい書物を見つけ出しては、それを熱心に読むようになったのでした。それも彼の特別に好んだのは科学の書物で、なかでもその頃一般に読まれたマーセット夫人の『物化学の話』

や、百科全書のなかの電気に関する部分が非常におもしろかったと、後に彼自身が述べています。そしてそういう書物を読むばかりでなく、僅かの小遣錢こづかいせんをつかつてそれらの書物に説明してある実験を行い、また電気については簡単な起電機なども自分でつくってみたということです。

科学の実験というものは、少しやり出すと、それからそれへとおもしろくなるもので、またいろいろな知識を得て、新しいことをして見たくもなるのです。それでその頃誰でも聴きにゆかれるような講義のあるのを探し出しては、それを聴きにゆきました。そして気の合った友だちが見つかると、互いに励まし合いながら実験を一緒に行ったりしていました。

そうしているうちに七、八年を過ぎて彼も二十一歳の青年になりましたが、製本屋の主人のリボーという人が、さすがにファラデーの学問修業に対して熱心なのに感じ入り、自分の店にいつも来るダンスという学者にその事を話したので、この人も大いに感心して、王立研究所で行われる講義の聴講券を持って来てファラデーに与えました。王立研究所というのは科学の研究をする機関でもあり、またそれと同時にわかり易い科学の講義を行って、一般の人々に科学を普及する役目をも果していたのでした。それでファラデーがこの聴講券で聞きに行ったときの講義は、その頃の若い有能な学者であったハンフリー・デヴィーという人の物化学に関するものでありました。ファラデーはそれを熱心に聞いて、

ますます科学に興味を感じ、何とかして自分も科学の研究をしてみたいということを一層強く希望するようになりました。そこでついに決心して、デヴィーに宛てて手紙を書き、それに自分の聞いた講義の筆記を添えて送りました。デヴィーもこれを見て大いに感心したので、この製本屋の奉公人であつたファラデイを呼びよせて親切な話をしてくれたばかりでなく、その後幾週間か経つと自分の助手が辞任したので、その代りにファラデイを助手に雇つてくれました。この助手の給料は製本屋のよりも少かつたのですが、それでもファラデイは自分の希望に沿うことができるので大いによろこびました。

これは一八一三年の春頃のことであつたのですが、その年の秋

にはデヴィーがフランス、イタリヤ、スウイスの国々へ學術研究の旅行に出かけることになったので、その秘書として同行することになりました。この時代にはもちろん汽車などは無かったのですから、これだけの旅行にも一年半の歳月を費したのですし、おまけにフランスはナポレオン以後イギリスとは敵対していたのですから、學術上の旅行であつたにしても容易なことではなかつたのでした。それでもどこをも無事に通過することができましたし、しよしよ諸處で有名な学者たちに面接したり、またいろいろの珍しい事がらを見聞したりして、大いに彼の知識をひろめるに役立ったのにちがいないのでした。そして一八一五年の春に帰国してまた王立研究所に勤め、それから彼の本当の学者生活が始まったのでし

た。

フアラデイがイタリヤのローマに滞在していたとき、十二歳になる小さな妹に送った手紙には、彼の愛情がいかにもよく現れています。

「マーガレットちゃん。私の手紙が届いたとのこと、マーガレットちゃんのお手紙もありがとう。いろいろ知らせて下さって、また私のからだや安否を気づかって下さって、あなたにお礼を言わなくてはなりません。手紙を読んだら第一に接吻^{せつぶん}を以て私の愛を母さんに伝えて下さい、そうして私はどんなに母さんとあなたとのことを考えているかをお話しして下さい。」

こんな書出しで学校での勉強のしかたなどをこまごまと教えて

いるのですが、そんな中にもファラデーの高い人格がよく窺^{うかが}われるのです。

学者生活

それからファラデーの五十二年にも互^{わた}る長い研究生生活が続いたのですが、その間に於^おける学問上の仕事は実にたくさんあって、ここではそれを一々お話ししているわけにゆきません。しかし、そのうちのごく主だったものだけを挙げれば、次のようなものでありましょう。

ファラデーは最初の頃には物化学の研究を主として行っていた

のでしたが、そのなかで当時の学界を驚かしたのは、塩素を始めて液化したこと、並びにベンゼンの発見であります。これは一八二三年から二箇年ほどの間のことでした。

ところが、ちょうどこの頃からエールステットの発見に続いて電気の研究がさかんになり出したので、ファラデーもこの問題に非常に興味を感じ、いろいろな実験を工夫しましたが、その結果、一八三一年には針金を磁石の極の間で動かすと、針金のなかに電流のおこることを見つけ出しました。これは電磁感應と名づけられている現象で、今日では大仕掛けに電流をおこすための発電機はすべてこれによっているのですから、それだけでもファラデーの仕事がどれほど大きな意味をもっているかがわかるわけです。

この発電機を逆にして、電流から動力を得るためにつかっている電動機というものも、やはり同じ原理によつてつくられているので、こういうものがなかったなら、現代の多くの工業は出来上つて来なかつたにちがいありません。

これに続いて、一八三三年には電気分解の法則を発見し、それからは光と電気及び磁氣との關係を研究したり、普通の磁石とは反対の性質をもつような反磁性というものを見つけ出したり、そのほかさまざまな実験的研究を行いました。そのうちで特別に大切なのは、磁石のまわりに鉄粉をふりまくと、それがいつも定まった曲線の形につながることを明らかにしたこと、このことからファラデーは、磁石の他に及ぼす力はその中間にある媒質を伝

わつてゆくという考えを確かめ、電氣の力もやはり同様であるとしたのでした。なぜ、それが大切であるかと云えば、それ以前には力は物体と物体との間に直接に働くという考えが普通であつたのでしたが、実際にはそうでなく、中間にある媒質がこれに関係しているということが、ここではつきりと示されたからであります。

ファラデーの後に、マクスウェルが電氣や磁氣の理論を正しくつくり上げることができたというのも、つまりはファラデーのこの考えに基づいたからであつて、それだけにファラデーの研究は非常に重要な意味をもっていたのでした。

上にも言いましたように、ファラデーの研究を一々述べていて

は限りがないほどに多いのですが、それらは『電気学に於ける実験的研究』という三巻の大きな書物にまとめて出されています。そこには、いろいろな試みや、途中の失敗などもその儘書ままいてあって、非常に有益な、またおもしろい書物であります。

ファラデーはすぐれた科学者であると共に、宗教上の信仰にも篤かったのです。それで若い頃からいつも教会に出入りしていたので、その教会の長老の娘であつたサラ・バーナード嬢と知り合いになり、一八二一年に結婚しました。それから一八二四年には王立協会の会員になり、翌年王立研究所の実験場の場長となり、一八二七年に王立研究所の教授となつて、これが一八六一年まで継続しました。その間にロンドン大学からの招しょうへい聘を受けたり、

ずっと後には王立協会の会長にも推薦されましたが、すべてそれらを断つて、専ら王立研究所のために尽したのでした。^{もっぱ}

王立研究所では一般の人々のための講義が行われていたのでしたが、ファラデーは特別に少年少女のために毎年クリスマスの日にごくわかり易い講義を行って科学を普及することを始めました。ファラデーのそういう講義のなかで最も有名なのは、『蠟燭の科学』というので、これは実におもしろいものです。我が国でもそれが矢島祐利氏^{やしますけとし}によって訳されて、岩波文庫の一冊として出版されていますから、まだそれを見ない方々は、ぜひ一度読んでご覧になることをお勧めします。なぜ科学がおもしろいかと云うことが、こういう書物でよくわかるでしょう。

ファラデーは研究生生活のほかに楽しい家庭生活をも味わって来たのでしたが、一八四一年頃には健康を少し損じたので、その夏にはスウイスへ保養に出かけ、それで元氣を取戻してまた研究を続けました。

併し^{しか}一八六二年頃からは老年による衰えが増して来て、ついは一八六七年の八月二十六日にこの一代の偉大な学者の生命が終つたのでした。それにしても彼の名声は今日になってますます輝かしく私たちの前にのこって居り、その科学上の仕事は永遠の生命をもっているのですから、またすばらしいではありませんまいか。

青空文庫情報

底本：「偉い科学者」 實業之日本社

1942（昭和17）年10月10日発行

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記をあらためました。

「之」は「これ」に、「益々」は「ますます」に、「遂に」を「ついに」に、置き換えました。

※読みにくい言葉、読み誤りやすい言葉に振り仮名を付しました。
底本には振り仮名が付されていません。

※「しかし」と「併《しか》し」の混在は、底本通りです。

※国立国会図書館デジタルコレクション (<http://dl.ndl.go.jp/>) で公開されている当該書籍画像に基づいて、作業しました。

入力：高瀬竜一

校正：sogo

2018年8月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたってのは、ボランティアの皆さんです。

マイケル・ファラデー

石原純

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>